日田市

PRINTED WITH SOY INK
Trademark of American Soybean Association

会所宮遺跡２次

日田市埋蔵文化財調査報告書第123集

2016

日田市教育委員会

日田市埋蔵文化財調査報告書第 123 集

会所宮遺跡２次

２０１６年

日田市教育委員会

序　　文

この報告書は、当委員会が平成25年度に店舗建設工事に伴って発掘調査を行った会所宮遺跡2次調査の内容をまとめたものです。

調査では、竪穴建物や土坑などから構成される弥生時代の集落跡が発見され、20年以上前の道路建設に伴う発掘調査で見つかっていた遺跡のさらなる広がりを確認することができました。

こうした発掘調査の成果をまとめた本書が、今後、文化財の保護や普及啓発、地元田島地区の歴史を知る手掛かりとして、また学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後に、調査に対するご理解やさまざまなご協力を賜りました関係者のみなさま、時には雪が舞い散る極寒のなか作業にご尽力いただきました作業員のみなさま、そして発掘調査をあたたかく見守っていただいた地元の皆様に、心より厚くお礼を申し上げます。

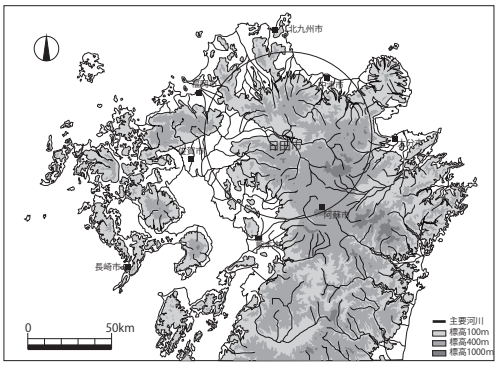
平成28年3月

日田市教育委員会

教育長　三笘　眞治郎

例　　言

1. 本書は、店舗建設事業に先立ち、平成25年度に市教育委員会が実施した会所宮遺跡2次の発掘調査報告書である。
2. 調査は店舗建設工事に伴い西日本企画株式会社の委託業務として日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。
3. 調査にあたっては、事業主および施工業者の方々や地元の方々にさまざまなご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。
4. 調査現場での遺構実測は森山・財津と調査担当者が行ったほか、株式会社埋蔵文化財サポートシステム大分支店に委託した。
5. 調査現場での写真撮影は、調査担当者が行った。
6. 本書に掲載した遺物実測は調査担当者が行ったほか、雅企画有限会社に委託した成果品を使用した。石器の製図は雅企画有限会社に委託した成果品を使用した。遺構および土器の製図は調査員および調査担当者が行ったほか、用松操（文化財保護課整理作業員）の協力を得た。
7. 本書に掲載した遺物写真は雅企画有限会社に撮影を委託し、その成果品を使用した。
8. 空中写真撮影は九州航空株式会社に委託し、その成果品を使用した。
9. 挿図中の方位は全て真北で表示している。
10. 写真図版の遺物に付した数字番号は、挿図番号に対応する。
11. 出土遺物および図面・写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
12. 本書の執筆・編集は、行時が担当した。



日田市の位置

本文目次

Ⅰ　調査の経過 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 2
Ⅲ　調査の内容 …… 3
　(1) 調査の概要 …… 3
　(2) 遺構と遺物 …… 5
　　1. 竪穴建物 …… 5
　　2. 土坑 …… 6
　　3. 溝状遺構 …… 8
　　4. その他の遺物…… 12
Ⅳ　総括 …… 12

写真図版目次

図版１　調査区遠景／調査区全景
図版２　竪穴建物／２区１号土坑／３区１号土坑
　　４区１～３号土坑
図版３　４区３号土坑／１区１号溝状遺構、１・２号土坑
図版４　出土遺物

本文写真目次

写真１　調査前風景
写真２　重機作業風景
写真３　発掘作業風景

挿図目次

第１図　遺跡位置図(1/4,000) …… 1
第２図　周辺遺跡分布図(1/15,000) …… 2
第３図　周辺地形図(1/600) …… 3
第４図　遺構配置図(1/200) …… 4
第５図　竪穴建物実測図(1/60) …… 5
第６図　土坑実測図(1/60) …… 7
第７図　溝状遺構実測図(1/80) …… 9
第８図　出土遺物実測図①(1/4) …… 10
第９図　出土遺物実測図②(1/4、1/2、2/3) …… 11

表目次

第１表　出土土器観察表 …… 13
第２表　出土石器観察表 …… 13

写真１　調査前風景

写真２　重機作業風景

写真３　発掘作業風景

Ⅰ　調査の経過

平成 25 年 10 月 1 日付けで西日本企画株式会社より市教育委員会あてに、日田市大字田島字中ノ手 488-1 ほか 5 筆について店舗建設工事に先立つ埋蔵文化財の所在に関する照会文書（事前審査番号 2013052）が提出された。

この開発予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である会所宮遺跡に該当し、開発対象地に隣接する市道建設の際に遺跡が確認されており、当該地にも遺跡が存在する可能性が非常に高いことが予想されたことから、その取扱いについて協議が必要である旨の文書回答を行った。その後 10 月 31 日には予備調査依頼が提出され、これを受けて 11 月 8 日に重機と作業員による予備調査を実施した。その結果、現地表面から約 40 ～ 75 ㎝の深さで遺構・遺物とも確認され、遺跡の存在が明らかとなった。予定地の造成はほぼ全面が盛土工法であるものの、店舗建物については独立基礎構造であり深さ数ｍの地盤改良を伴うことから、独立基礎部分については遺跡の保存が困難であると判断し、これを中心とした範囲の発掘調査の実施に向けて開発主と協議を重ねた。その結果、平成 26 年 1 月 7 日に事業主との委託契約を取り交わし、1 月 16 日から 3 月 10 日までの間、発掘調査を実施した。また平成 26 年 6 月 2 日から 9 月 16 日の間整理作業を実施し、報告書作成を行った。現地での発掘調査の経過は次のとおりである。

1 月 16 日　重機による表土除去・遺構検出開始

1 月 31 日　作業員による遺構検出および遺構掘り下げ開始　雨雪と地下からの湧水の処理に苦慮

3 月 4 日　測量・遺構実測開始（株式会社 埋蔵文化財サポートシステム 大分支店に委託）

3 月 10 日　器材撤収、現地での作業完了

なお、調査組織は次のとおりである。

平成 25 ～ 27 年度

調査主体	日田市教育委員会
調査責任者	合原多賀雄（日田市教育長／～ 26 年 6 月）
	三笘眞治郎（同教育長／ 26 年 7 月～）
調査統括	財津俊一
	（日田市教育庁文化財保護課長／ 25・26 年度）
	柴尾健二（同課長／ 27 年度）
調査事務	園田恭一郎
	（同課埋蔵文化財係長・主幹／～ 27 年 9 月）
	古賀信一（同課埋蔵文化財係主幹／27年10月～）
	武内貴彦（同専門員／ 25 年度）
	華藤善紹（同副主幹／ 25 年度）
	諫山温子（同主事・主任／ 26・27 年度）
調査担当	行時桂子（同主査）
調査員	若杉竜太・渡邉隆行（同主査）、
	上原翔平（同主任）
発掘作業員	江藤キミ子、加藤祐一、河津定雄、
	河津モリ、北澤幾子、合原建國美、
	五反田静子、財津真弓、森山敬一郎
整理作業員	伊藤一美、黒木千鶴子、武石和美、
	安元百合

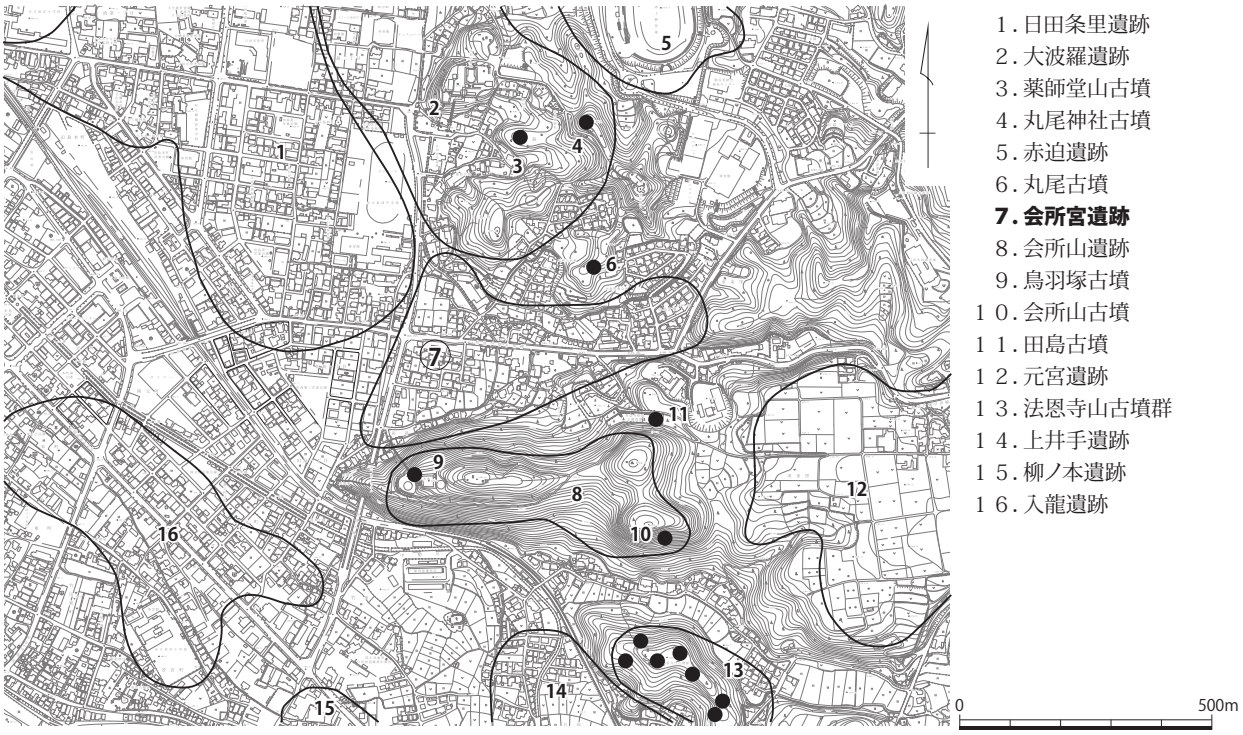
第 1 図　遺跡位置図（1/4,000）

Ⅱ　遺跡の立地と環境（第１・２図）

会所宮遺跡は盆地東部、阿蘇４火砕流堆積物により形成された元宮原台地一帯から浸食によって西へ向かって広がる扇状地に位置する。この一帯は現在、宅地のほか学校・病院・商業店舗として利用されており、遺跡の西部を南北に縦断する道路建設の際、平成２・４・７年度に発掘調査が行われている。平成２年度実施の１次Ａ区では12世紀中頃～後半の溝が見つかり、平成４年度実施の１次Ｂ区では縄文時代晩期末～古墳時代中期の複数の溝が確認されている。とりわけ平成７年度実施の１次Ｃ区は今回の調査区の西隣にあたり、弥生時代中期前半代とされる円形竪穴建物や、同時期～古墳時代後期とされる複数の溝などが確認されていることから、会所宮遺跡は概ね弥生時代中期前半代～古墳時代後期を中心とする集落遺跡と認識されている。

次に会所宮遺跡の周辺の遺跡を見てみる。会所宮遺跡の南を限る標高約170ｍの丘陵、通称「会所山」には会所山遺跡（8）がある。この「会所山」は『豊後国風土記』景行天皇巡幸説話に登場する「久津媛」伝承が残る場所で、特徴的な３つの頂部が見られ、弥生時代後期の土器片が採取されている。この会所山には他に、西側中腹に鳥羽塚古墳（9）、東側頂上付近には会所山古墳（10）、会所山から会所宮遺跡の谷に下りる中腹に田島古墳（11）が存在し、さらに会所山から南に小谷を挟んだ丘陵上には、装飾古墳１基を含む円墳７基からなる国史跡・法恩寺山古墳群（13）があり、古墳時代後期の小規模な古墳が集中している。会所山から東へ続く元宮原台地は全体が元宮遺跡（12）として周知されており、平坦な畑地部分で弥生時代～古墳時代の土器が採集され、北東の小高い場所では成人用・小児用の甕棺墓や石棺墓・石蓋土坑墓を中心とする弥生時代～古墳時代の大規模な墓群が見つかっているなど、当該時期における日田地域の大集落のひとつと考えられている。目を会所宮遺跡の北側・西側に転じてみると、北に連なる丘陵に丸尾古墳（6）、丸尾神社古墳（4）、県史跡・薬師堂山古墳（3）が点在している。これらの丘陵から西に展開する平地部分には大波羅遺跡（2）や日田条里遺跡（1）が存在し、特に大波羅遺跡では古代の大型柱穴列や「山」「田」銘墨書土器・転用硯など公的施設の存在を窺わせる内容が確認されている。このように、会所宮遺跡付近一帯は概ね弥生時代～古代に栄えた地域といえる。

《参考文献》『日田市史』日田市　1990　ほか日田市教育委員会発行の関係遺跡報告書など



１．日田条里遺跡
２．大波羅遺跡
３．薬師堂山古墳
４．丸尾神社古墳
５．赤迫遺跡
６．丸尾古墳
７．会所宮遺跡
８．会所山遺跡
９．鳥羽塚古墳
１０．会所山古墳
１１．田島古墳
１２．元宮遺跡
１３．法恩寺山古墳群
１４．上井手遺跡
１５．柳ノ本遺跡
１６．入龍遺跡

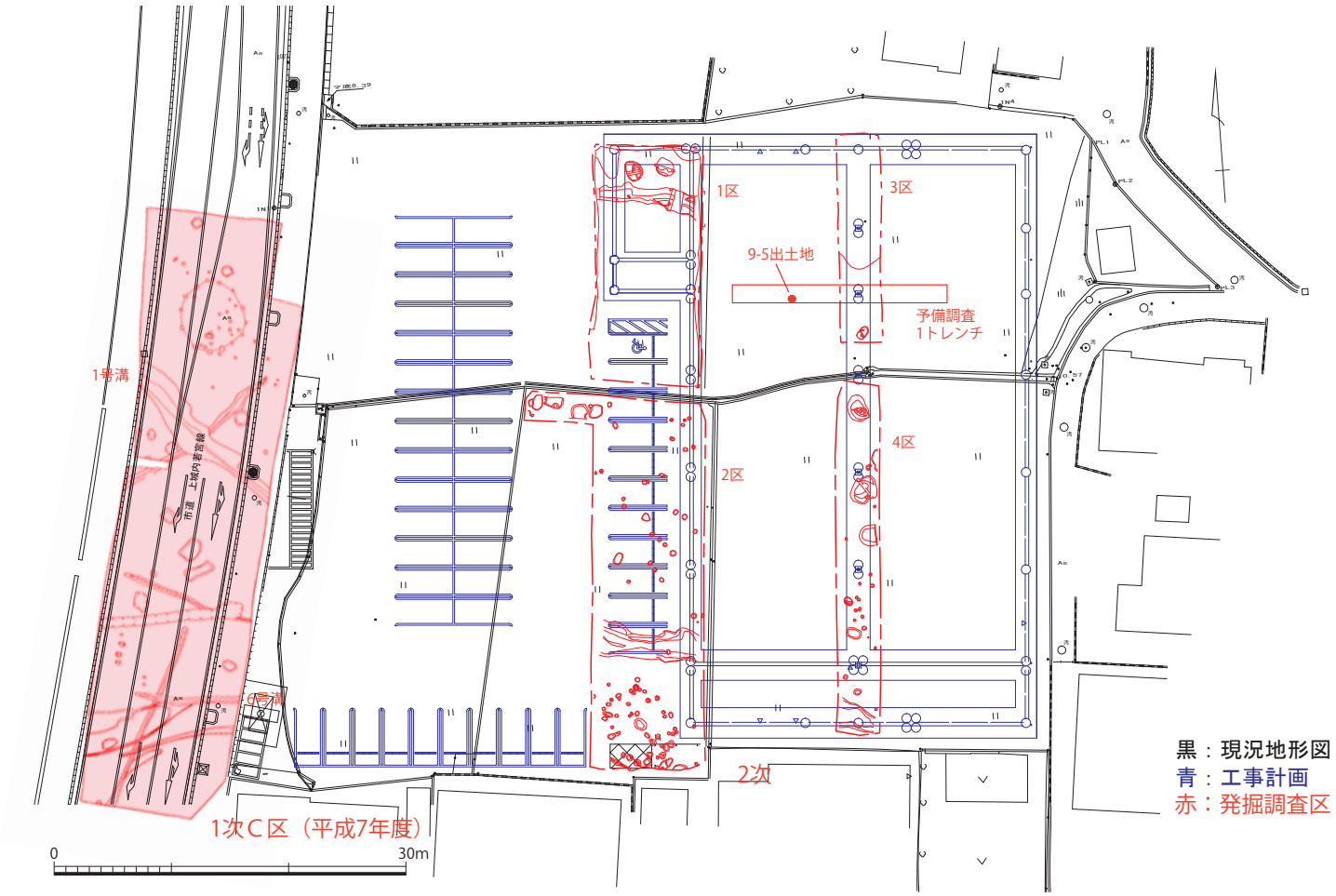
第２図　周辺遺跡分布図（1/15,000）

Ⅲ　調査の内容

（１）調査の概要

開発予定地は従前より水田として利用されており、予備調査では現水田基盤土直下から現地表面下約 75 ㎝の間で土坑・ピットや弥生時代中期～後期の土器が確認された。開発計画では店舗建物の独立基礎工事によりこれらの遺構面よりも掘削が深く及ぶこととなっていたため、調査は店舗建設範囲のうち、建物基礎によって遺跡が損なわれる部分を中心に調査区（1 ～ 4 区）を設定した。西側の標高の低い水田に 1・2 区を、東側の標高の高い水田に 3・4 区を設け、工事の都合上 1・3 区の一部の調査を早急に完了させる必要があったことから、調査区全体の現耕作土の除去後、1 区から遺構検出を開始した。1 区では現基盤土の下に約 60 ㎝、3 区では同様に 20 ㎝ほどの厚さで近年の造成土が見られ、平成 7 ～ 8 年頃の隣接する道路建設工事の際に水田の嵩上げが行われたようである。1 区ではその下の旧耕作土直下で溝や土坑が検出されたが、3 区では遺物は数点出土したものの明確な遺構は見られなかった。2・4 区は現基盤土直下で竪穴建物や溝・土坑が検出され、北に行くほど現基盤土からの深さが若干深くなった。予備調査時に対象地東側で谷状に落ち込む旧地形が確認されており、2・4 区北側や 3 区はこの旧地形の影響を受けているものと思われる。また、いずれの調査区でも近年の造成を除き現水田基盤土直下で遺跡が確認されたことから、水田化の際に大きく削平を受けているものと思われる。

今回の調査で確認された主な遺構は、竪穴建物 1 軒、土坑 11 基、溝状遺構 2 条である。以下、これらの遺構および出土遺物の説明を行う。



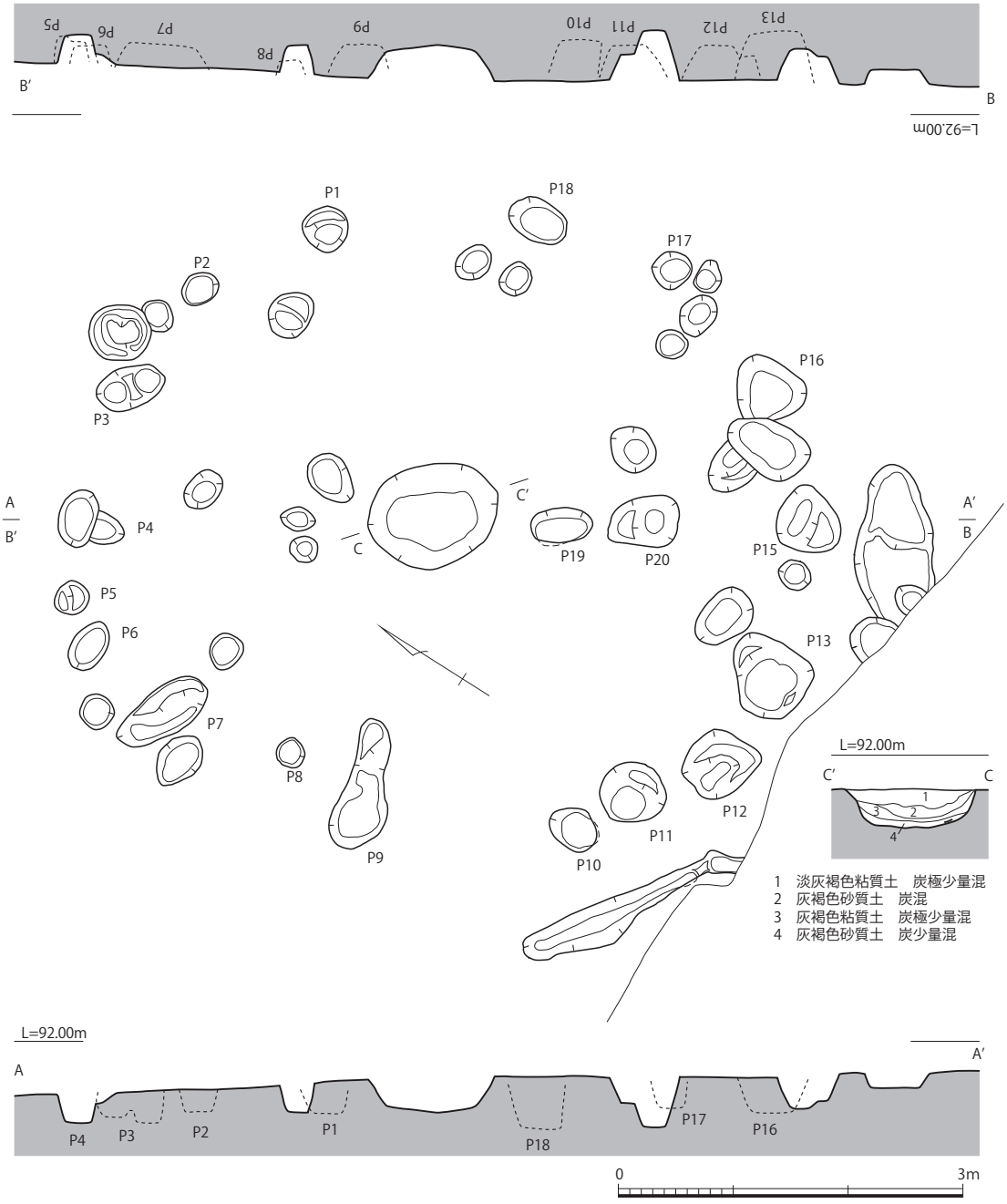
第 3 図　周辺地形図（1/600）

第 4 図　遺構配置図（1/200）

（２）遺構と遺物

１．竪穴建物（第５図、図版２）

２区南端で検出された。水田化の際に大きく削平を受けているため、中央土坑と柱穴群のみの検出である。遺構検出面の標高は北に向かって少し下がる。柱穴群の平面形はやや南北に長い円形を呈し、P15 の南および P10 ～ 12 の南西には柱穴群に沿うような溝が見られ、壁際溝の可能性がある。検出面での規模は、柱穴列の長軸約 6.5 m、短軸約 5.7 m、壁際溝と思われる溝を含めると、長軸約 7.6 m、短軸約 6.6 mを測る。範囲内には多くのピットが見られるが、ピット底面のレベルが中央土坑と同等または中央土坑よりも深いものを柱穴と見なした場合、それぞれの直径は約 30 ～ 70 ㎝前後で検出面からの深さは約 20 ～ 40 ㎝を測る。P7・9 は中央土坑に向かって長く伸びており、柱木を抜き取った痕跡の可能性がある。中央土坑は約 1.1 m×約 0.9 m、深さは最大で 30 ㎝を測り、少量ではあるが炭化物が見られ、炉と考えられる。柱穴の数から数度の建替えが行われたものと思われる。



第５図　竪穴建物実測図（1/60）

この遺構からは弥生土器甕・器台が出土している。

竪穴建物出土遺物（第8図、図版4）

1～5は甕の口縁部である。いずれも小片で、断面がコの字状または逆L字形を呈する。5は赤褐色を呈し、二次被熱の痕跡と思われる。6～8は器台である。6は内面にシボリ痕が見られる。

２．土坑

1区で2基、2区で5基、3区で1基、4区で3基、計11基が検出された。区ごとに記述する。

1区1号土坑（第6図、図版3）

1区北端､1区1号溝状遺構の北側で検出された。平面形は不整円形を呈し､検出面での規模は1.6ｍ×1.35ｍ、深さは最大で27㎝を測る。この遺構からは弥生土器壺が出土しているが、床面の形状や埋土の状況から人為的なものとは考え難く、半裁のみの掘り下げとした。

1区2号土坑（第6図、図版3）

1区1号土坑の西隣で検出された。平面形は不整円形を呈し、検出面での規模は1.7ｍ×1.4ｍ、深さは最大で15㎝を測る。この遺構からは弥生土器の小片が数点出土しているが、図化可能なものはなかった。

2区1号土坑（第6図、図版2）

2区西端で検出された。平面形は不定形を呈し、北側は湧水処理のため一部未掘である。西側は一段低く掘り込まれており、わずかにオーバーハングする。検出面での規模は約1.3＋αｍ×約1.2ｍ、深さは約15～25㎝を測る。この遺構からは床面から若干浮いた状態ではあるが弥生土器の甕と壺が出土しており、甕については2区3号土坑のものと接合している。

2区2号土坑（第6図）

2区西端、2区1号土坑の東で検出され、1号土坑に切られ、北側は湧水処理のため一部未掘である。平面形は長円形を呈するが、床面は平坦でなく、人工的なものではない可能性がある。検出面での規模は約1.6＋αｍ×約1.0＋αｍ、深さは最大で30㎝を測る。この遺構からは弥生土器片が数点出土しているが、図示可能なものはなかった。

2区3号土坑（第6図）

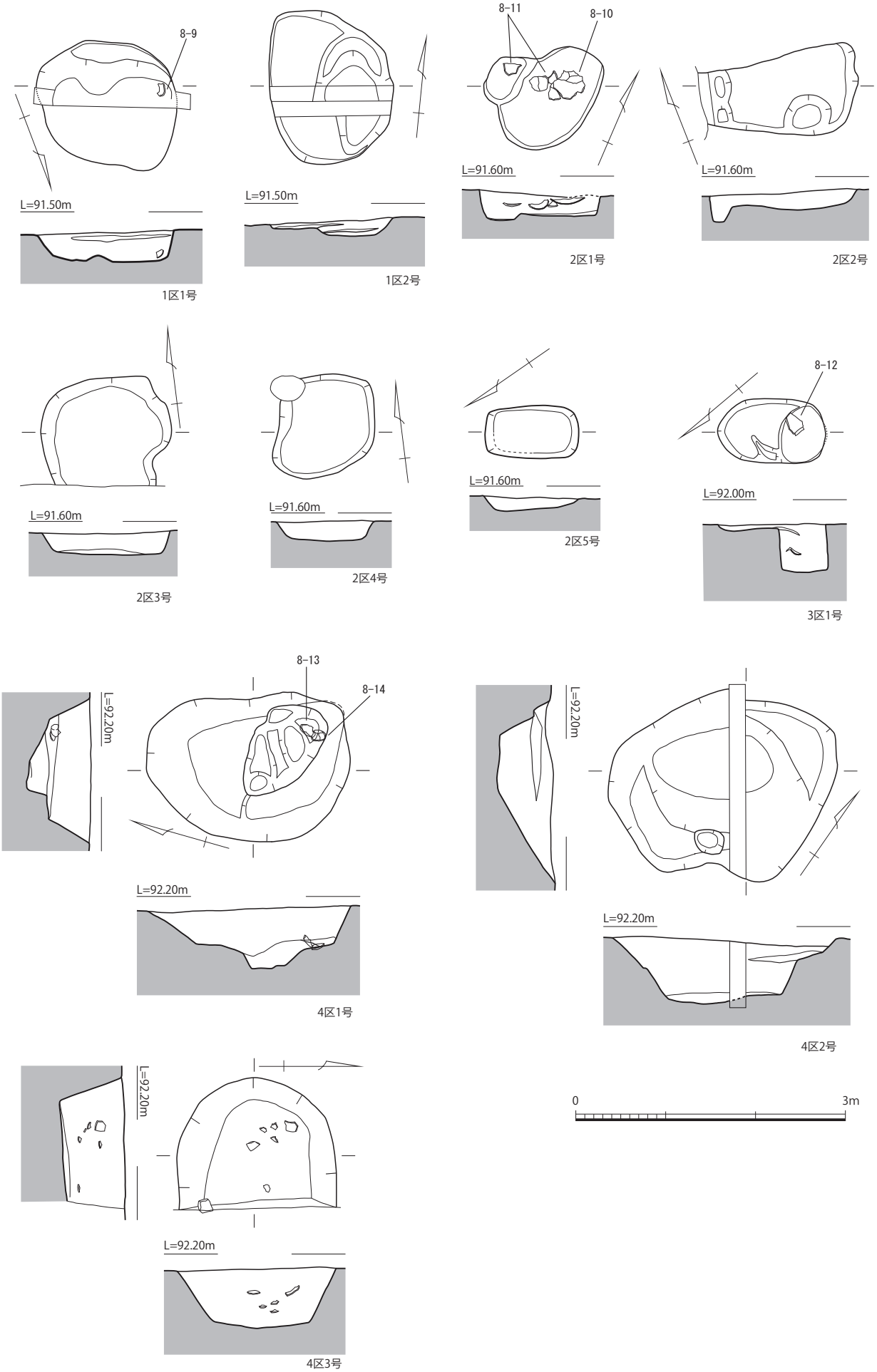
2区西端、2区1・2号土坑の東で検出され、南側は湧水処理のため一部未掘である。平面形は不定形を呈するが､床面に細かな起伏があり､人工的なものではない可能性がある。検出面での規模は約1.45ｍ×約1.2＋αｍ、深さは最大で25㎝を測る。この遺構からは土器片が出土しており､2区1号土坑のものと接合したものもあるが、そのほかに図示可能なものはなかった。

2区4号土坑（第6図）

2区西端、2区3号土坑の東で検出され、北西隅をピットに切られる。平面形は不整円形を呈し、検出面での規模は約1.2ｍ×約1.1ｍ、深さは最大で20㎝を測る。この遺構からは弥生土器の小片が数点出土しているが、図示可能なものはなかった。

2区5号土坑（第6図）

2区のほぼ中央、2区1号溝状遺構の北約5ｍで検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、検出面での規模は約1.05ｍ×約0.55ｍ、深さは最大で15㎝を測る。この遺構からは時期不明の土器片が出土しているが、図示できなかった。



第 6 図　土坑実測図（1/60）

3区1号土坑（第6図、図版2）

3区南端で検出された。平面形は長円形を呈し、南側は深く掘り込まれている。検出面での規模は約1.2ｍ×約0.7ｍ、深さは最大で55㎝を測る。この遺構からは図示した弥生土器甕のほか、図示できなかったが1条の低い台形突帯をもつ甕の破片などが出土している。なお、図示した甕は遺構の深く掘り込まれた部分から浮いた状態で確認されたもので、流れ込みによると考えられる。

4区1号土坑（第6図、図版2）

4区北端で検出された。平面形は不整円形を呈し、床面は平らでなく起伏がある。検出面での規模は約2.3ｍ×約1.65ｍ、深さは最大で70㎝を測る。この遺構からは弥生土器や剥片が出土している。第8図13・14の甕・壺は床面からの出土である。

4区2号土坑（第6図、図版2）

4区北半、4区1号土坑の南約5ｍで検出された。平面形は不整円形を呈し、内面には東西に1つずつテラス状の段がある。検出面での規模は約2.5ｍ×約2.0ｍ、深さは最大で約70㎝を測る。この遺構からは図示した弥生土器台付甕や甕のほか、図示できなかったが1条の三角形突帯をもつ大型の甕の破片などが出土している。

4区3号土坑（第6図、図版3）

4区北半、4区2号土坑の南約2ｍで検出され、東半は調査区外へと続く。平面形は円形または長円形を呈し、検出面での規模は約1.7ｍ×約1.4＋αｍ、深さは最大で70㎝を測る。この遺構からは流れ込みの状態で土器片が数点出土したが、図示できるものはなかった。

土坑出土遺物（第8・9図、図版4）

第8図9は1区1号土坑出土の壺の底部である。10・11は2区1号土坑出土の甕・壺である。10は外面に平行タタキとミガキが施されている。11は上部が意図的に打ち欠かれており、外面に黒斑が見られる。12は3区1号土坑出土の甕である。外面は平行タタキとミガキが施され、ススが付着している。13・14は4区1号土坑出土の甕の底部である。13は平らな底部であるが、14はわずかにレンズ状を呈する。外面にススが付着している。15・16は4区2号土坑出土の台付甕と甕の底部である。16の底部は厚く、わずかに上げ底を呈する。

第9図10は4区1号土坑出土の剥片と思われる石器である。黄茶褐色を呈し、石材はチャートと思われる。

３．溝状遺構

1区で1条、2・4区で各1条検出された。2・4区のものは同一遺構と考えられるため、まとめて記述する。

1区1号溝状遺構（第7図、図版3）

1区の調査区中央部で検出され、調査区内を東西に横切り、両端とも調査区外へ続く。調査区内での検出規模は、長さ約8.6ｍ、確認面での幅は約1.1～1.75ｍ、深さ約4～30㎝を測る。床面は一定でなく起伏が見られるものの深さはほぼ平坦で、東から西に向かってわずかに傾斜する。断面は浅い皿状を呈し、自然流路と考えられる。この遺構からは弥生土器の小片のほか須恵器の小片が少量、また石器が出土している。

2・4区1号溝状遺構（第7図、図版3）

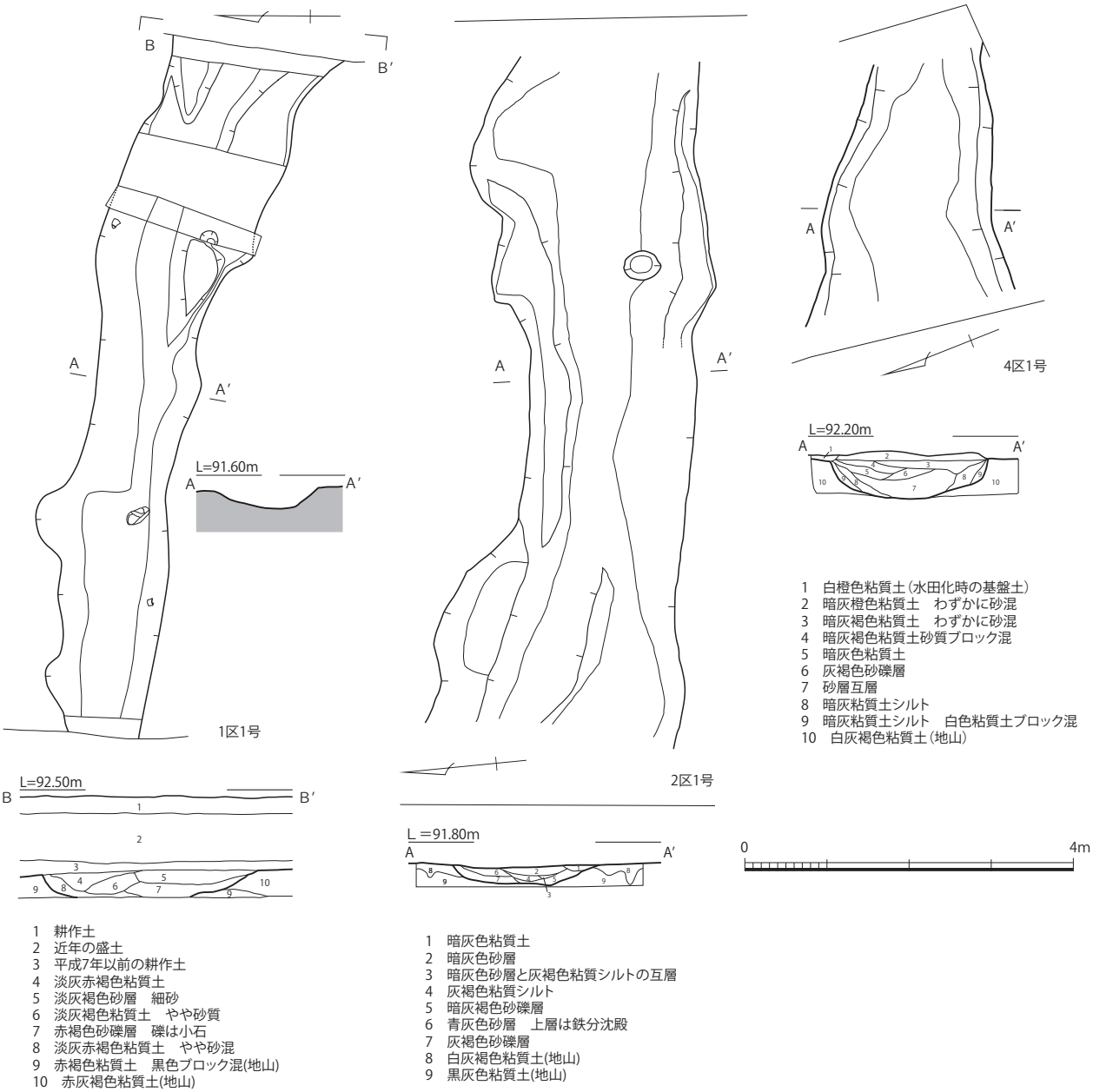
2区の中央やや南寄りと4区南端で検出され、調査区内を東西に横切り、両端とも調査区外へ続く。調査区内での検出規模は、2区で長さ約9.6ｍ、最大幅約3.0ｍ、深さ60㎝前後、4区で長さ約3.8ｍ、最大幅約2.7ｍ、深さ25㎝前後を測り、2・4区をつなげた場合、長さは約25.6ｍとなる。断面形は2区で浅い皿状、4区で幅の広いU字状を呈す。周辺の地形と同様に東から西、すなわち4区から2区に向かって床面が低くなっており、埋土中に粘質土やシルト層とともに青灰色砂層や細かい砂の互層が見られることから、水が流れたり澱んだりを繰り返していたものと思われる。この遺構からは弥生土器のほか、土師器や須恵器、石器が出土している。図示は

できなかったが、赤色顔料が塗布された土師器器台と思われる小片も出土している。

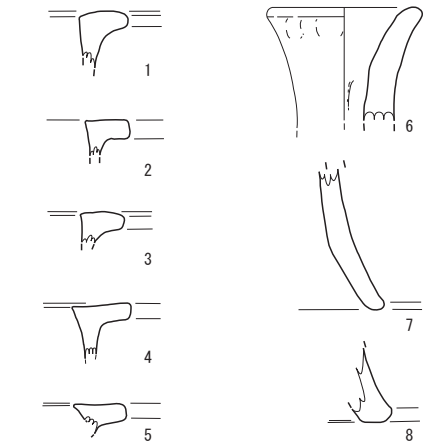
溝状遺構出土遺物（第 8・9 図、図版 4）

第 8 図 17 ～ 19 は 1 区 1 号溝状遺構出土である。17 は弥生土器甕の口縁部で、断面逆 L 字形を呈する。18・19 は弥生土器壺の口縁部と思われる。20 ～ 29 は 2 区 1 号溝状遺構出土である。20･21 は弥生土器甕の口縁部で、断面逆 L 字形を呈する。23･24 は弥生土器甕の底部でいずれも上げ底を呈し、23 はやや薄く、24 は厚い底となっている。22 は弥生土器壺の口縁部で、鋤先状を呈する。25･26 は土師器の甕である。25 は外面に工具痕が見られる。27 ～ 29 は須恵器で、27 は坏蓋、28 は坏身である。27 は天井部と口縁部との境目の稜などは見られない。28 の受部は上向きに外へ伸び、受部上面には凹線が施されている。29 は穿孔はないものの鍵と思われる肩部片である。

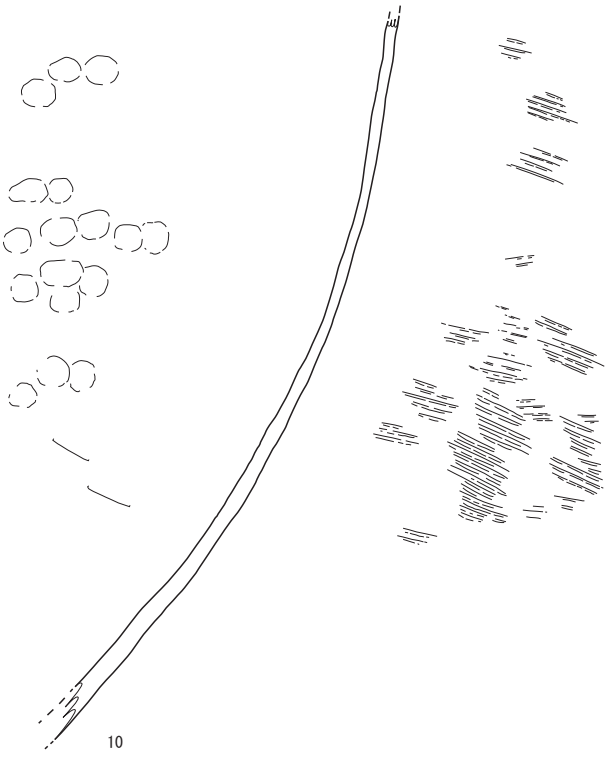
第 9 図 1 ～ 3 は 4 区 1 号溝状遺構出土である。1・2 は弥生土器甕の口縁部と底部である。1 は断面コ字状を呈する。2 は厚い底部となっている。3 は土師器甕の口縁部である。

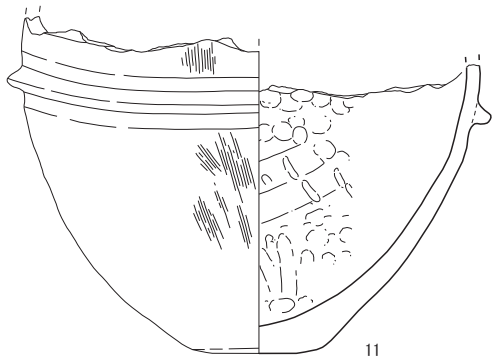


第 7 図　溝状遺構実測図（1/80）

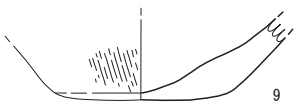


竪穴建物

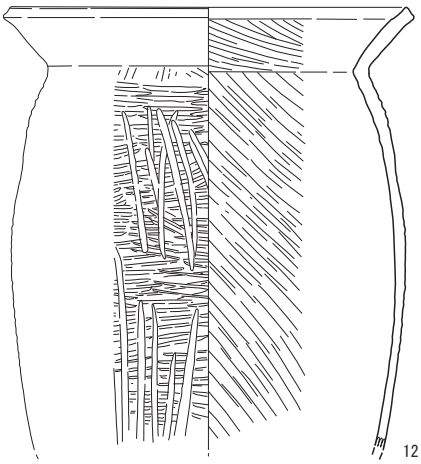




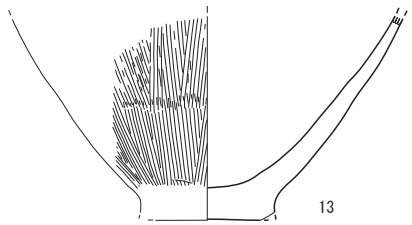
2区1号土坑



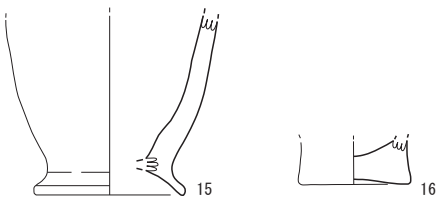
1区1号土坑



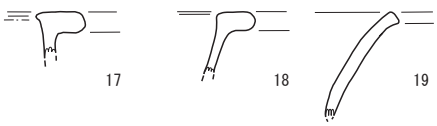
3区1号土坑



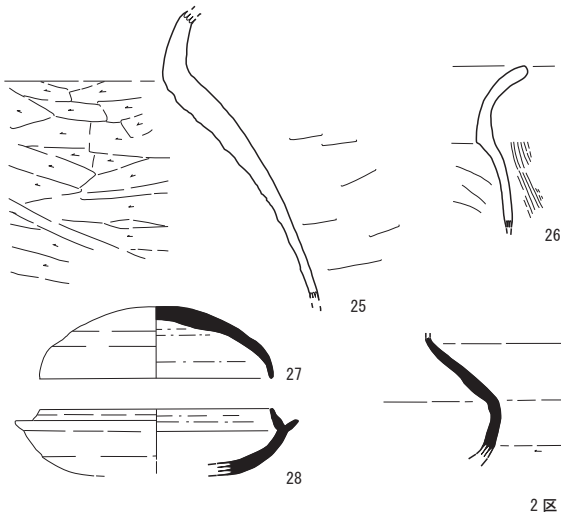
4区1号土坑



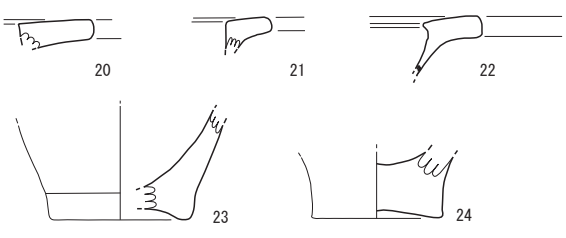
4区2号土坑



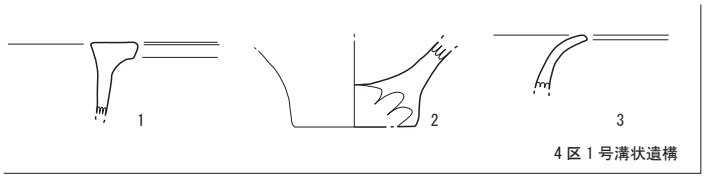
1区1号溝状遺構



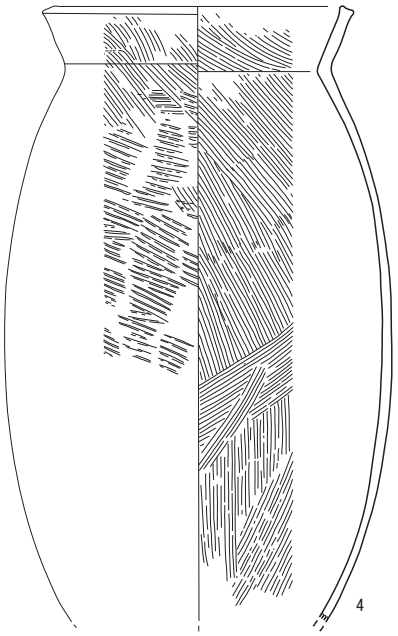
2区1号溝状遺構

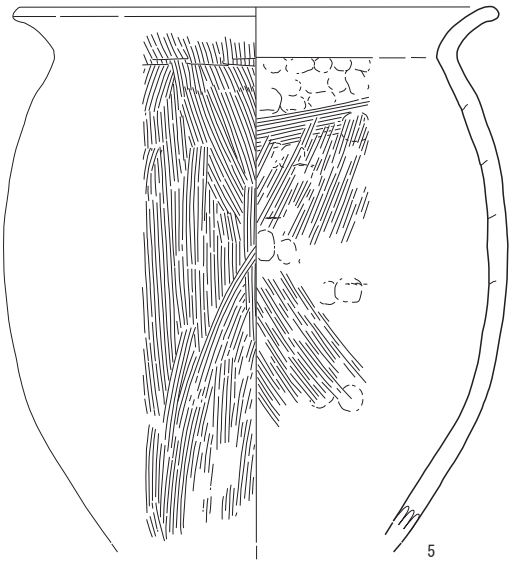


第8図　出土遺物実測図①（1/4）

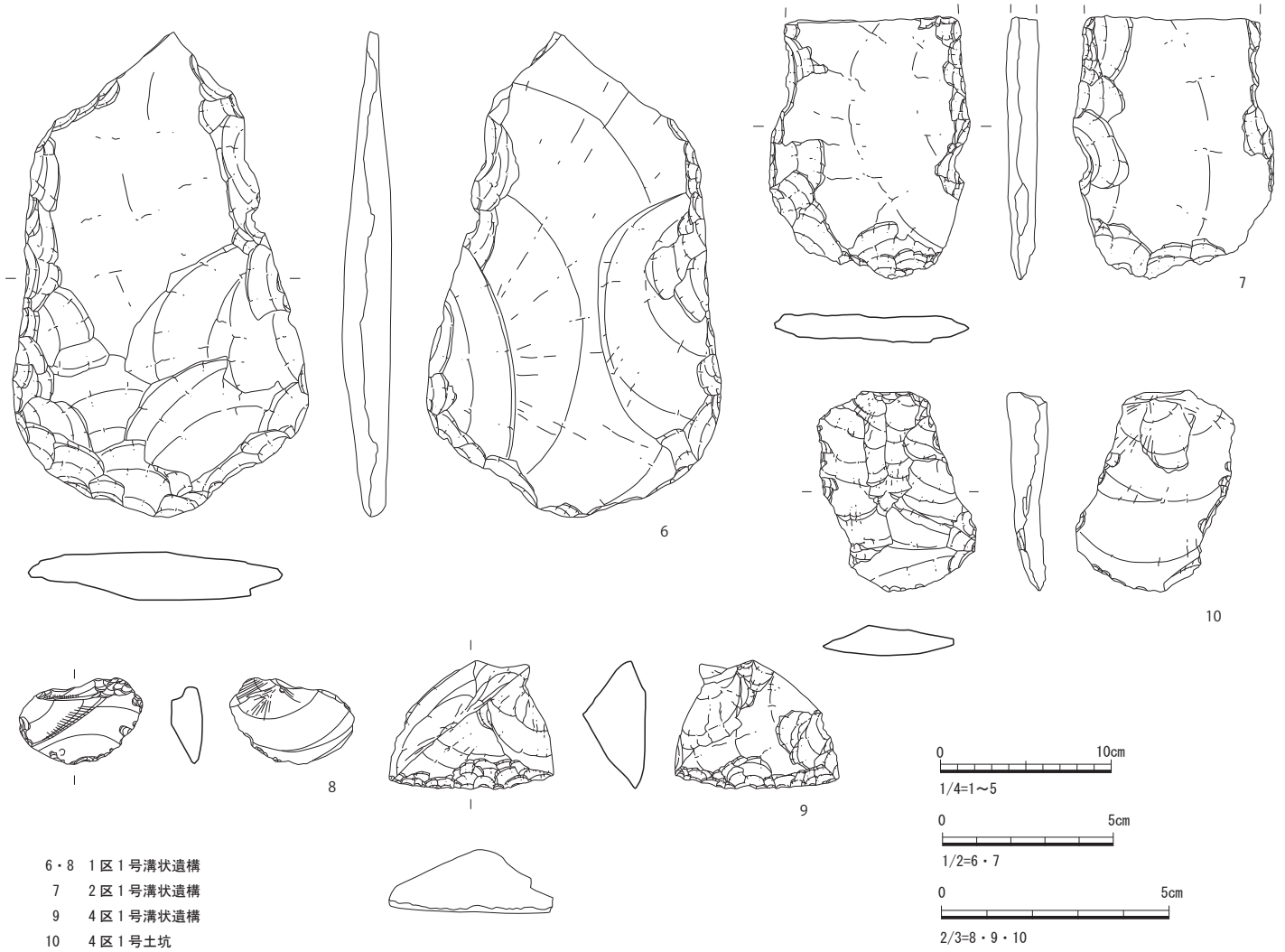


4区1号溝状遺構





予備調査時



6・8　1区1号溝状遺構
7　2区1号溝状遺構
9　4区1号溝状遺構
10　4区1号土坑

第9図　出土遺物実測図②（1/4、1/2、2/3）

第9図6・8は1区1号溝状遺構出土の石器である。6は完形の打製石斧で、石材は安山岩である。8は黒曜石の二次加工剥片である。7は2区1号溝状遺構出土の打製石斧である。石材は安山岩で、基部を破損している。9は4区1号溝状遺構出土のスクレイパーと思われるものである。石材は安山岩である。

4．その他の遺物（第9図、図版4）

ここでは、予備調査時の出土遺物を取り上げる。5は1トレンチの土坑からの出土である（第3図参照）。

4・5とも弥生土器甕である。4は外面に平行タタキが施されており、ススが付着している。5は内外面ともハケメ調整が行われており、内面には指オサエ痕が残る。4と同様、外面にススが付着している。

Ⅳ　総括

今回の調査では主に竪穴建物1軒、土坑11基、溝状遺構2条が確認された。まずは出土遺物などから、各遺構の時期を比定してみる。竪穴建物は削平により床面を失い、やや長い円形にめぐる柱穴と炉とみられる中央の土坑のみである。出土遺物は小片ばかりであるが、短い逆L字型を呈する甕口縁部の特徴が隣接する1次調査C区（以下「1次C区」）2・3号土坑などの出土遺物と同様であることから、弥生時代中期前半代と考えられる。1区1号溝の遺物も同様であろう。1区1号土坑はややレンズ状気味の底部から、弥生時代後期と思われる。2区1号土坑はタタキの残る甕や、ややレンズ状を呈し丸みを帯びる底部から、弥生時代後期中頃～後半と考えられる。4区1号土坑も同様にややレンズ状を呈する甕底部から、同時期と思われる。4区2号土坑については遺物の時期を明らかにし難いが、1号土坑と同様の形状・深さを呈することから同時期の可能性が高いと考えられ、4区3号土坑も同様であろう。3区1号土坑出土の甕は外面全体に残るタタキや内面の粗いハケメ、上方に立ち上がる口縁部と砲弾状に長胴化した胴部から、弥生時代後期終末と考えられる。予備調査時出土の甕にも同様の特徴が見られ、この時期にも今回調査地の近くで集落が営まれていたことを物語る。2区1号溝状遺構と4区1号溝状遺構は位置関係から同一のものと思われ、調査区が全体的に大きく削平されていることや埋土に砂層・砂礫層が観察されることを考慮すると、検出面付近から出土した須恵器から少なくとも6世紀後半ごろまでは水流のある溝として機能していたと思われる。

2区1号土坑からは、今回の調査区の中ではほぼ唯一と言ってよいほど比較的大きな土器がまとまって出土している。1次C区では溝や土坑から、甕や壺を主体として器台・高坏・鉢などがまとまって出土しており、一括廃棄ととらえられている。今回の調査区の西端に位置する2区1号土坑は1次C区の一括廃棄された遺構群の東端にあたるものと思われる。また4区1～3号土坑については、いずれも直径2ｍ前後、深さ70㎝ほどの大型のもので、埋土中に炭化物等は見られなかったものの、貯蔵穴の可能性が考えられる。

2・4区1号溝状遺構は、標高の高い東側では断面が幅の広いU字状を、低い西側では浅い皿状を呈する比較的しっかりしたものである。約30ｍ離れた1次C区では東から西に向かって流れる溝が複数確認されており、なかでも1・6号溝が6世紀後半とされているが、今回確認されたものはその規模や流れる方向から、1次C区1号溝に続くものであると考えられる（第3図参照）。この溝の初現時期は明らかにできないが、1次C区の円形竪穴建物と今回の竪穴建物がともに溝と切合わないことから、少なくとも弥生時代中期前半代には存在していたものと思われ、溝を挟んで円形竪穴建物が南北に1軒ずつという集落配置が見えてくる。また、1次C区では遺構密度は低いながらも全面に当該期の遺構が広がっていたが、今回の調査区では広がりと言えるほどの密度もなく、調査区の西または北に想定される当該期の集落の東限に近い可能性が考えられる。

《参考文献》土居和幸ほか編『会所宮遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第11集　日田市教育委員会　1996

第1表　出土土器観察表

挿図番号	遺構名	種別	器種	法量			調整			胎土	焼成	色調		備考
				口径	底径	器高	外面	底部外面	内面			外面	内面	
8-1	2区1竪P9	弥生土器	甕	-	-	(3.0)	不明	-	不明	ABCDG	やや不良	淡橙褐色	淡橙褐色	
8-2	2区1竪P9	弥生土器	甕	-	-	(1.8)	ナデ	-	不明	ABCF	良	淡橙褐色	淡橙褐色	
8-3	2区1竪P9	弥生土器	甕	-	-	(1.6)	不明	-	ナデ	ABC	良	淡褐色	淡褐色	
8-4	2区1竪中央土坑	弥生土器	甕	-	-	(2.9)	ナデ	-	ナデ	ABCH	良	淡褐色	淡褐色	
8-5	2区1竪P16	弥生土器	甕	-	-	(1.6)	ナデ	-	不明	ABCEH	良	赤褐色	赤褐色	2次被熱か。
8-6	2区1竪P13	弥生土器	器台	(7.6)	-	(6.0)	ナデ？、指オサエ	-	ナデ？	ACE	良	にぶい橙色	にぶい橙色	内面にシボリ痕あり
8-7	2区1竪P10	弥生土器	器台	-	-	(7.4)	不明	-	不明	ABCH	良	淡橙褐色	淡橙褐色	
8-8	2区1竪P9	弥生土器	器台	-	-	(4.0)	指オサエ？	-	不明	ABC	良	暗褐色	暗褐色	
8-9	1区1土-1	弥生土器	壺	-	9.2	(4.3)	ハケメ	ナデ	ナデ	ACDE	良	橙色	明褐色	内外面とも摩滅のため調整不明瞭
8-10	2区1土、2区1土-1、2区3土	弥生土器	甕	-	-	(38.2)	平行タタキ、ナデ	-	指オサエ後ナデ（工具痕）	AEFH	良	灰白色	にぶい橙色	
8-11	2区1土、2区1土-2	弥生土器	壺	-	6.9	(17.8)	ハケメ、ナデ	ナデ	指オサエ、ナデ（工具痕）	ACD	良	にぶい橙色	にぶい橙色	打ち欠き、外面に黒斑あり
8-12	3区1土-1	弥生土器	甕	(20.8)	-	(23.4)	平行タタキ、ミガキ	-	ハケメ	ACE	良	にぶい黄橙色	にぶい橙色	体部外面にスス付着
8-13	4区1土-1	弥生土器	甕	-	-	(10.7)	ハケメ、ナデ	ナデ	ハケメ後ナデ	ACDE	良	明赤褐色	暗赤褐色	底部は接合面で欠け、接合前にハケメを施す
8-14	4区1土-2	弥生土器	甕	-	9.1	(8.2)	ハケメ	ナデ	指オサエ、ナデ	ACDE	良	にぶい赤褐色	黒褐色	外面にスス付着
8-15	4区2土	弥生土器	台付甕	(7.8)	-	(9.5)	ハケメ？	-	ヘラケズリ？	ABCE	良	淡褐色	暗褐色～褐色	
8-16	4区2土	弥生土器	甕	-	(5.8)	(2.3)	不明	不明	不明	ABCH	良	橙褐色	黄褐色	
8-17	1区1溝	弥生土器	甕	-	-	(2.5)	不明	-	ナデ	ABCE	良	淡褐色	淡褐色	
8-18	1区1溝	弥生土器	壺	-	-	(3.3)	不明	-	不明	ABCEH	良	褐色	淡橙褐色	
8-19	1区1溝	弥生土器	壺	-	-	(5.5)	ナデ	-	ナデ	ABCG	良	淡褐色	淡褐色	広口壺か。体部との接合部で破損。
8-20	2区1溝	弥生土器	甕	-	-	(1.5)	不明	-	不明	ABC	良	赤褐色	赤褐色	2次被熱か。
8-21	2区1溝	弥生土器	甕	-	-	(1.7)	不明	-	ナデ	ABCH	良	白褐色	白褐色	
8-22	2区1溝	弥生土器	壺	-	-	(3.2)	不明	-	不明	ABCH	良	暗褐色	淡褐色	
8-23	2区1溝	弥生土器	甕	-	(7.3)	(5.8)	不明	不明	不明	ABCH	良	赤褐色	黒褐色	外面は2次被熱か。
8-24	2区1溝	弥生土器	甕	-	(6.8)	(3.5)	不明	不明	不明	ABCEH	良	赤褐色	暗褐色	外面は2次被熱か。
8-25	2区1溝-2	土師器	甕	-	-	(15.3)	ナデ（工具痕）	-	ケズリ	ACE	良	灰白色	黄灰色	
8-26	2区1溝	土師器	甕	-	-	(8.5)	ハケメ、ナデ	-	ケズリ	ABC	良	淡褐色	黒褐色	
8-27	2区1溝-1	須恵器	坏蓋	(12.4)	-	3.8	回転ナデ、手持ちヘラケズリ	-	回転ナデ	BCH	良	暗灰色	暗灰色	
8-28	2区1溝	須恵器	坏身	(12.3)	-	(3.5)	回転ヘラケズリ、回転ナデ	-	回転ナデ	ABC	良	暗灰色	暗灰色	受部最大径：15.0cm
8-29	2区1溝	須恵器	甕？	-	-	(6.3)	回転ナデ、回転ケズリ	-	回転ナデ	AE	良	暗灰色	暗灰色	
9-1	4区1溝	弥生土器	甕	-	-	(3.8)	ナデ	-	不明	ABCDEH	良	淡黒褐色	淡褐色	
9-2	4区1溝	弥生土器	甕	-	(6.4)	(4.4)	不明	不明	不明	ABC	良	淡褐色	淡黒褐色	
9-3	4区1溝	土師器	甕	-	-	(2.9)	ナデ	-	ナデ	ABCEH	良	淡黒褐色	淡褐色	
9-4	試掘2013052	弥生土器	甕	(15.0)	-	(32.5)	平行タタキ、ハケメ、ナデ	-	ハケメ	ACDE	良	にぶい橙色	にぶい橙色	体部外面にスス付着
9-5	試掘1トレ1土	弥生土器	甕	(24.8)	-	(28.3)	ハケメ、ナデ	-	ハケメ、指オサエ	ACE	良	明赤褐色	明赤褐色	体部外面にスス付着

法量の単位はcm。（）書きは、残存と復原を表す。

胎土：A角閃石　B石英　C長石　D赤色粒子　E白色粒子　F黒色粒子　G雲母　H砂粒

第2表　出土石器観察表

挿図番号	実測番号	遺構名	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
9-6	1	1区1溝	打製石斧	安山岩	14.20	8.65	1.45	178.04	
9-7	2	2区1溝	打製石斧	安山岩	(7.75)	(5.90)	(0.95)	56.40	
9-8	3	1区1溝	二次加工剥片	黒曜石	1.90	2.70	0.70	3.27	
9-9	4	4区1溝	スクレイパー？	安山岩	2.85	3.60	1.40	10.84	
9-10	5	4区1土	剥片？	チャート？	4.40	3.50	0.90	10.97	

※単位はcm、g。（）は現存長

図版 1

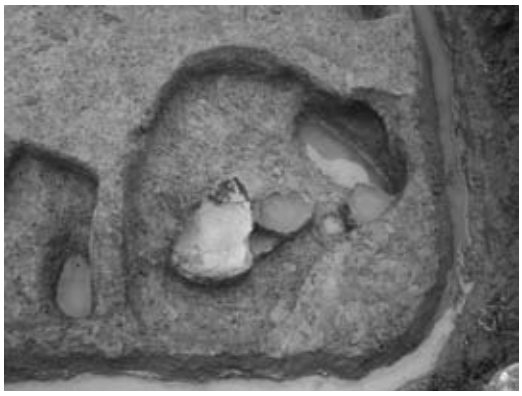
調査区遠景（東から）白丸が調査地

調査区全景（画面上が北）※1・3 区北側は工事により埋め戻されている。

竪穴建物検出状況（西から）

竪穴建物完掘状況（西から）

竪穴建物中央土坑土層



2 区 1 号土坑（北から）

3 区 1 号土坑（南から）

4 区 1 ～ 3 号土坑検出状況（北西から）

4 区 1 号土坑（西から）

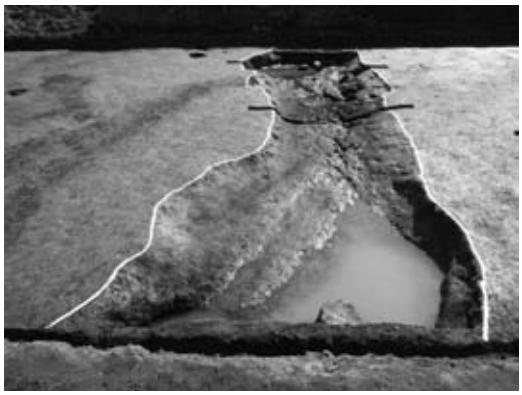
4 区 2 号土坑（西から）

図版 3

4 区 3 号土坑（西から）

1 区 1 号溝状遺構と 1・2 号土坑（西から）

1 区 1 号溝状遺構東壁土層

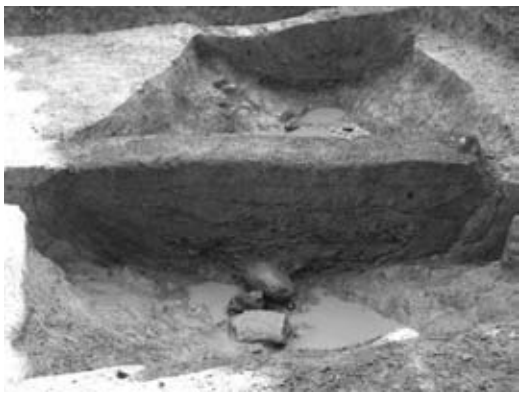


2 区 1 号溝状遺構完掘状況（西から）

2 区 1 号溝状遺構土層（西から）

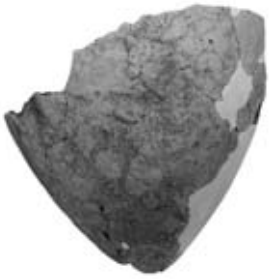
2 区 1 号溝状遺構遺物出土状況

2 区 1 号溝状遺構・竪穴建物完掘状況（西から）



4 区 1 号溝状遺構土層（西から）

8-6



8-10

8-11

8-12

8-13

8-14

8-27

9-4

9-5

9-6

9-7

9-8

9-9

9-10

報　告　書　抄　録

ふりがな	よそみやいせき2じ
書名	会所宮遺跡2次
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第123集
編著者名	行時　桂子
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
所在地	〒877-0077　日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601　日田市田島2丁目6-1
発行年月日	2016年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
会所宮 遺跡 2次	大分県日田市 大字田島	44204-6	204150	33° 18′ 59″	130° 56′ 42″	20140116 ～ 20140310	672㎡	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
会所宮 遺跡 2次	集落	弥生時代	竪穴建物1 土坑11 溝状遺構2 ピット	弥生土器 土師器 須恵器 石器	弥生時代中期前半の円形 竪穴建物

要　約

会所宮遺跡は、これまでに道路建設に伴う発掘調査で弥生時代の集落や古代～中世の溝・柵列などが確認されている。

今回の調査地は弥生時代中期前半代の円形住居跡が確認された1次C区の東にあたり、水田基盤土直下で竪穴建物・土坑・溝状遺構・ピットが確認された。竪穴建物は大きく削平を受けて柱穴と中央土坑のみの残存であるが、C区と同様に円形の建物と考えられる。土坑では特に4区で確認された3基が平面・深さとも規模が大きく、埋土中に炭化物等は見られなかったものの、貯蔵穴の可能性が考えられる。溝状遺構はいずれも標高の高い調査区東側から低い西側に向かっており、埋土中に砂層が含まれることから水流があったことがうかがえる。特に2・4区1号溝状遺構は、その規模や方向から、1次C区1号溝につながるものと考えられ、円形竪穴建物と切合わないことから、同時に存在していたものと思われる。

会所宮遺跡2次
2016年3月31日

編　集　日田市教育庁 文化財保護課
877-0077　大分県日田市南友田町516-1
発　行　日田市教育委員会
877-8601　大分県日田市田島2丁目6-1
印　刷　株式会社インデバイス
877-0076　大分県日田市亀川町848-1